

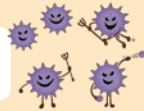
子宮けいがんの予防について ～HPVワクチンについて知ってください～

HPVワクチンは、**小学校6年から高校1年相当の女子**を対象とした定期予防接種です。令和5年4月より、子宮けいがんの原因の**80～90%**を防ぐことができる**9価のHPVワクチン**が、新たに公費で接種できるようになりました。

子宮けいがんを予防するために、下記についてご理解の上、是非HPVワクチンの接種についてご検討ください。



子宮けいがんとは？

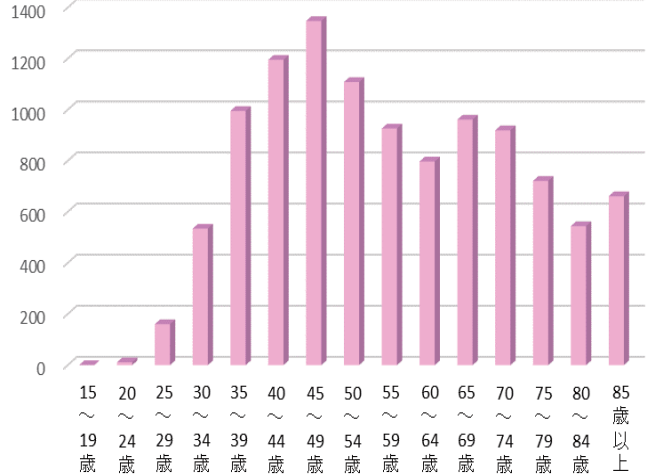


子宮けいがんは、子宮のけい部という子宮の出口に近い部分にできるがんで、HPV（ヒトパピローマウイルス）の感染が原因と考えられています。

日本では**毎年、約1.1万人の女性**が子宮けいがんになり、**毎年、約2,900人の女性**が亡くなっています。

25～40歳の女性のがんによる死亡の第2位は、子宮けいがんによるものです。HPVは一度でも性的接触の経験があれば、だれでも感染する可能性があります。

(人) 子宮けいがんと新たに診断された女性の数(2019年)



子宮けいがん^{けい}で苦しまないためにできることは、**HPVワクチンの接種**と**子宮けいがん検診の受診**の2つです。
(HPVの感染を予防) (がんを早く見つけて治療)

HPVワクチンの効果

- ・ HPVの中には子宮けいがんを起こしやすい種類のものがあります。HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。
- ・ 2価、4価ワクチンは、子宮けいがんの原因の**50～70%**を防ぎます。
- ・ 9価ワクチンは、子宮けいがんの原因の**80～90%**を防ぎます。
- ・ がんになる手前の状態が減るとともに、がんそのものを予防する効果があることも分かってきています。

HPVワクチンのリスク

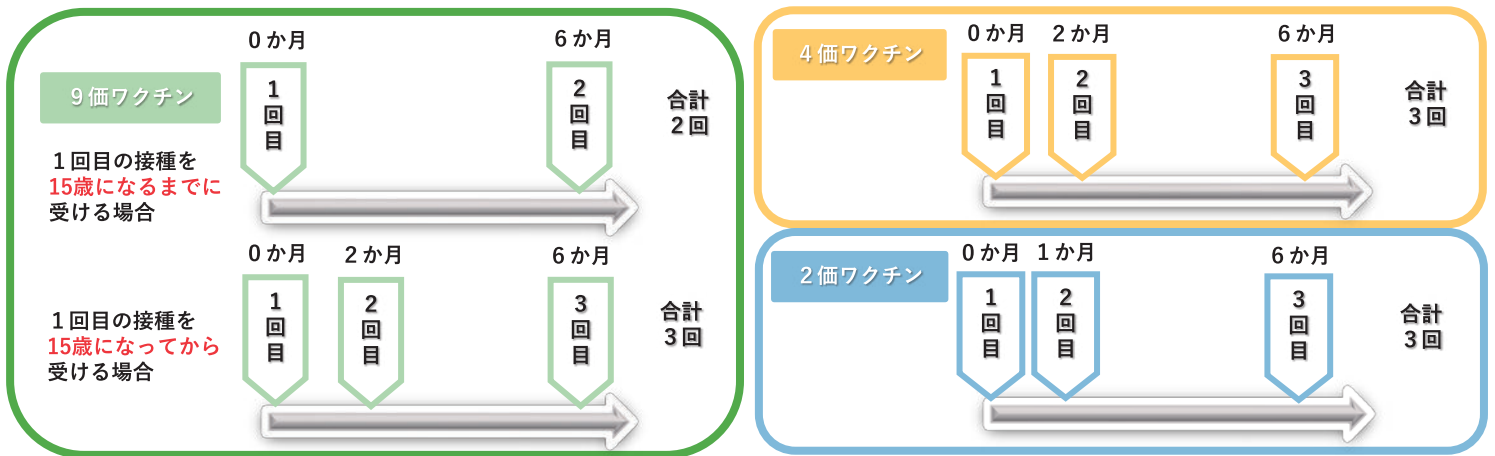
- ・ 接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状^{しょうじょう}が起こることがあります。
- ・ ワクチンの接種を受けた後に、まれにですが重い症状が起こることがあります。ワクチンが原因となったものかどうかわからないものをふくめて、接種後に重篤^{じゅうとく}な症状として報告があったのは、ワクチンを受けた**1万人あたり約5～7人※**です。

※2価および4価ワクチンは約5人、9価ワクチンは約7人

HPVワクチンを受けていても2年に1度検診を受けることが大切です。

接種スケジュール

ワクチンの種類や接種する年齢によって、接種の回数や間隔が少し異なりますが、2価・4価・9価ワクチンも半年～1年の間に決められた回数接種します。



平成9年度生まれ～平成18年度 生まれの女性の方へ

- HPVワクチン接種への積極的勧奨が差し控えられていた期間に定期接種の対象であった方々の中には、接種の機会を逃した方がいます。こうした方に公平な接種機会を確保する観点から、令和7年3月まで公費で接種を受けることができるようになりました。
- 16歳頃までに接種するのが最も効果が高いですが、定期接種の対象年齢（高校1年相当まで）を過ぎても、ある程度の有効性があることが国内外の研究で示されています。



HPVワクチンに関する相談先一覧

一般的な相談窓口（医療、健康被害救済制度等に関するご相談）	
一般的な相談窓口 （医療、健康被害救済制度等に関するご相談）	電話番号
福岡県保健医療介護部がん感染症疾病対策課	092-643-3596
※下記市にお住いの方の相談窓口	
北九州市保健福祉局感染症医療政策課	093-582-2090
福岡市保健医療局健康医療部保健予防課	092-711-4270
久留米市健康福祉部保健所保健予防課	0942-30-9730
予防接種の実施に関する相談窓口 →お住いの市区町村の予防接種担当部門	
接種後に、気になる症状が出たとき →まずは、接種を受けた医師・かかりつけの医師にご相談ください	

引用：厚生労働省 HPVワクチン接種の対象年齢のお子様及びその保護者向けリーフレット

HPVワクチンに関する詳細については、
右のQRコードから厚生労働省ホームページをご覧ください。



福岡県医師会・福岡県産婦人科医会・福岡県小児科医会